

豊富な観光資源で「復興」に確かな手応え

福島県は都道府県の中で面積が三番目に広い。浜通り、中通り、会津と呼ばれる三つの地方に分かれ、それぞれに魅力的な観光地を持つ。

2011年3月に起きた東日本大震災と東京電力福島第一原発事故は、福島県を訪れる観光客の減少を招いた。だが、観光業界をはじめ行政や経済団体などの取り組みにより観光客は戻りつつある。2011年に訪れた観光客は約3521万人で、前年より約2196万人減った。2017年は約5449万人に増え、震災前年の95%に回復した。

県内には公益財団法人日本城郭協会の「日本100名城」に選ばれた鶴ヶ城(会津若松市)、二本松城(二本松市)、小峰城(白河市)がある。小峰城は白河藩主の居城だった。藩主には江戸幕府で老中を務め、寛政の改革を進めた松平定信公もいた。1991年には史実通りに三重櫓(やぐら)が復元された。しかし、震災により三重櫓の壁にひびが入り、石垣も計10カ所で崩れた。国史跡の文化財のため、石垣は江戸時代の工法に倣って修復され、今年3月末に完了した。ぜひ、白河市民が「復興のシンボル」と親しむ小峰城を訪れてほしい。

福島県は訪日外国人からも熱い注目を集める。観光庁が3月末に発表した宿泊旅行統計調査の速報値によると、1月の外国人延べ宿泊者数は1万7700人で、対前年同月比で約2.4倍となり、伸び率が都道府県別で最も高くなった。昨年1年間の外国人延べ宿泊者数は12万250人に達し、震災と原発事故以降で初めて10万人を超えた。会津地方を走るJR只見線沿線の眺望は外国人を魅了する。福島空港を発着するチャーター便も増加傾向にある。台湾との間には4月から2年間にわたり定期運航され、年間最大約7200人が訪れる見込みだ。

震災と原発事故から8年が過ぎ、観光振興へ明るい兆しは多い。豊富な観光資源の発信と受け入れ環境の一層の整備が、今後ますます大切になる。

福島民報社 論説委員会幹事 川原田秀樹



「復興のシンボル」として白河市民に親しまれる小峰城の三重櫓